

# 立ヶ花城跡等緊急発掘調査報告書

(送電線鉄塔建設地点遺跡緊急発掘調査)

1981年3月

中野市教育委員会  
中部電力株式会社長野支店

## 序　　言

千曲川が中野市の西部を北へ流下して高丘丘陵の西端で篠井川と合流する地点の岬状に突出したところに立ヶ花城山があります。

この地は粘土・砂・礫の互層であって、標高377.6m、延徳田圃との比高差は約50mあり、中世後期に構築されたと推定される山城遺構があります。この付近一帯は旧石器時代から縄文・弥生・古墳・古代・中世にわたる一大複合遺跡として知られているところでもあります。

この度、中部電力株式会社が送電線鉄塔建設事業を行うことになりましたので、遺跡保護のため、中野市教育委員会では、緊急発掘調査を実施することになりました。

調査は長野県文化財保護指導委員・中野市文化財保護審議長金井汲次先生を団長に、調査主任小野沢捷、調査員植原長則、金井文司、調査補助員小林軍司・池田実男・長針功・畔上克臣の各氏にお願いするとともに地域の方々や高等学校生徒諸君にも依頼し、多數の皆様方の御協力を得て、昭和55年8月20日から9月16日まで発掘調査を実施しました。

酷暑や降雨等の悪天候の日が多くたにもかかわらず、金井調査団長先生の総密な計画や適切な御指導のもとに調査員や調査補助員の皆様の献身的な御努力によって、旧石器・縄文時代の遺物、弥生時代の遺構・遺物、多くの古代祭祀遺物・遺構やまた中世末の山城の遺物・遺構等極めて重要な資料の発掘により学術上多大の成果をあげることができました。

この発掘調査に御尽力くださった金井団長先生をはじめ諸先生方、御協力いただいた皆様方と中部電力株式会社の御理解と御協力に対し厚く御礼申しあげます。

昭和56年3月

中野市教育委員会教育長　菅　沼　利　雄



# 目 次

(中野市教育委員会教育長)

序 言

目 次

図版目次

1.はじめに	1
(1)発掘までの経過	1
(2)調査団の構成	3
(3)発掘の経過	3
(4)調査の整理	6
2.遺跡の立地と環境	6
3.立ヶ花城跡	9
(1)地層	9
(2)遺構・遺物	10
1) 旧石器遺物	10
2) 縄文遺物	11
3) 异生遺構・遺物	12
4) 祭祀遺構・遺物	14
5) 城跡・遺物	16
6) 周辺出土遺物	20
4.立ヶ花表遺跡	22
5.上の山第1号窯址調査	22
(1)調査の経過	22
(2)遺構	22
(3)遺物	22
(4)周辺出土遺物	26
6.むすび	28

# 図 版 目 次

第1図 遺跡遠景	1
第2図 立ヶ花城跡発掘風景	3
第3図 調査団メンバー	3
第4図 距離入れ式	4
第5図 周辺遺跡分布図	9

第6図 地層図	10
第7図 旧石器遺物	11
第8図 繩文遺物	11
第9図 遺構図	12
第10図 弥生住居址実測図	13
第11図 弥生遺物実測図	14
第12図 U字状溝地層図	14
第13図 U字状溝断面図	14
第14図 祭祀遺物実測図	15
第15図 土師片出土分布図	18
第16図 土墾地層実測図	18
第17図 立ヶ花城跡実測図	折り込み
第18図 周辺出土遺物実測図(1)	21
第19図 " (2)	21
第20図 上の山窯址灰原実測図	23
第21図 灰原断面図	24
第22図 灰原出土遺物実測図	25
第23図 灰原写真	26
第24図 上の山窯址発掘風景	26
第25図 周辺出土遺物実測図	27

図版1 遺跡全景(千曲川堤防より)

図版2 立ヶ花城跡発掘風景

図版3 祭祀遺物出土状態

図版4 U字溝状遺構

図版5 旧石器・繩文・弥生遺物

図版6 銃弾・古銭・刀子・鎗身

図版7 祭祀遺物

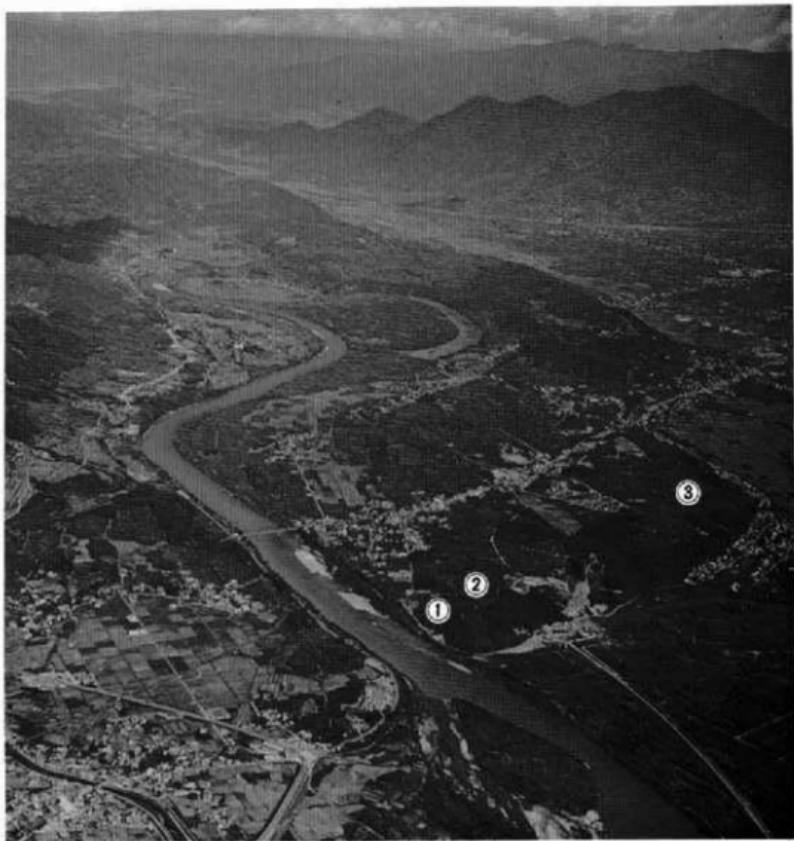
図版8 石製茶臼

## 1. はじめに

### (1) 発掘までの経過

当立ヶ花城跡等緊急発掘調査は、55年6月12日金井汲次県文化財保護指導委員による「文化財パトロール」が実施された際、中部電力送電線用仮設鉄塔工事を始めていたことから、発掘届の点についての確認を求められた。

当件について、市への届出はないことから、急便県文化課への照会、中部電力長野支店への連絡などをおこない、翌13日に、市教育委員会事務局において、鉄塔建設計画についての説明を聴取した。



第1図 遺跡遠景 千曲川工事事務所提供  
①立ヶ花城跡 ②立ヶ花表遺跡 ③上ノ山墳址

その計画によると「平穂吉田線は、豊野・中野方面の電力供給の幹線として高稼動を続けており、当方面的の電力需要の堅調な伸びにより、56年度には供給支障が予想されるため、既設平穂吉田線の内、豊野変電所から平穂吉田線53号（中野市西条）までの鉄塔建替および送電線の張替工事を施行し、送電容量を増加させ当方面への一層の電力供給の安定を図る。」ことを目的に、8月5日から着手、56年6月30日工事等の終了予定日として工事計画が立案されていることが判明した。

この計画のうち、草間・立ヶ花地区は周知の埋蔵文化財の宝庫であるが、事業の性格は公共性の強いものであり、時間的余裕もないことから6月24日急場現地協議等をおこなうこととし、その手配をした。

その日程経過は

① 6月17日 埋蔵文化財の発掘協議書を受理

計画仮鉄塔・鉄塔建設地と周知の埋蔵文化財包蔵地の位置

工事計画	該当包蔵地域
仮鉄塔 鉄塔 No36 No76	立ヶ花城跡
仮鉄塔 No31	清水山窯址
仮鉄塔 No25	林畔窯址
仮鉄塔 No23	大久保館址
鉄塔 No67	上ノ山窯址

② 6月24日 現地協議

ア 出席者

郷道哲章県教委文化課指導主事、金井汲次中野市文化財保護審議委員（発掘担当予定者）

中部電力長野支店田中光三用地部用地第一課副長外2名、中野市教委事務局社会教育課から藤澤、岩戸が出席

イ 協議の結果

発掘調査を必要とする埋蔵文化財包蔵地

工事計画	該当包蔵地名称	要発掘調査			備考
		所在	在地	地目	
鉄塔 No67	窯址	大字草間字上ノ山1889-2		畠	9m <sup>2</sup>
鉄塔 No72	包蔵地	大字立ヶ花字表874-2, 875-2		処理場用地	16m <sup>2</sup>
鉄塔 No73	城跡	大字立ヶ花字表777-2, 778-2		山林	36m <sup>2</sup>
仮鉄塔No36	城跡	大字立ヶ花字表山778-1		山林	9m <sup>2</sup>
					4脚×2.25m <sup>2</sup>

◎発掘に要する経費負担は中部電力株式会社とする。

③ 7月2日 県教育委員会教育長名をもって、現地協議結果の指導と発掘調査委託の場合の協力依頼伝達された。

④ 7月18日 中部電力長野支店長から、現地協議結果とともに「埋蔵文化財発掘届」の提出があり、県教育委員会教育長あて経由進呈した。また、本件を緊急発掘調査することとし、その見通しがついたので、文化財保護法第98条の2第1項の規定による「発掘届」を、8月14日付をもって文化庁長官あて提出をした。



第2図 立ヶ花城跡発掘風景

## (2) 調査団の構成

今回の緊急発掘調査を成功させるため、次のとおり調査団を構成し、それの方に8月20日付市教育委員会名で、ご委嘱申しあげた。

### ○調査団

調査責任者 菅沼利雄 中野市教育委員会教育長

調査団長 金井汲次 日本考古学協会員、中野市文化財保護審議会長

調査主任 小野沢捷 長野県考古学会員

調査員 橋原長則 全上

調査員 金井文司 全上

調査補助員 小林軍司 高井地方史研究会員、中野市文化財保護協力員

池田実男 全上

長針 功 全上

畔上克臣 高井地方史研究会員

事務局 中野市教育委員会事務局社会教育課



第3図 調査団メンバー

## (3) 発掘の経過

8月20日（水）小雨時々曇

午前は、小雨の中、立ヶ花城跡現地で調査団の結成ならびに調査の安全祈願を含めて報助入れ式を行い、発掘範囲の決定とグリットの設定及び調査場用のテント張りを行なった。午後は、5カ所のグリットに分れ、表土はぎからの発掘調査に入った。No.10グリットからは、元符通宝1枚と旧石器（黒曜石）、その他グリットからは多数の土器片が出土。

参観者 北原宗司氏ほか。

8月21日（木）曇時にわか雨

昨日に引き続いて発掘調査を行う。また鉄物関係調査用として水道課職員2名の派遣を依頼し金属探知機による探査を行うも大きな反応がなかった。午後、文久永宝検出、旧石器（黒曜石）1点、他に土師器・土器片・石（工作台）等出土。

参観者 荒井勇一立ヶ花区長ほか。



第4図 鉢助入れ式

8月22日（金）雨

雨のため発掘作業を中止。遺物整理を行う。

8月23日（土）曇時々雨

連日の雨のため、足場が悪く作業は難渋したが発掘調査を継続。午後は土曜日であることをから市教委事務局職員の多数の発掘参加を得て実施した。北信タイムス黒鳥記者 取材に来所

参観者 小林小エ門氏ほか。

8月24日（日）晴

発掘調査開始以来はじめての陽光を見、調査に熱が入る。発掘調査の状況。調査地の全景、遠景を撮影する。石皿、高坏、土器等出土、またU字形遺構が検出された。

参観者 西原製鉄慶氏ほか。

8月25日（月）晴

前日につづき晴天、発掘調査も順調に進んだ。午後、立ヶ花表山遺跡か所の調査のため手分けをし実施した。ルリ色小玉、高坏等出土。北信ローカル石川記者 取材に来所。

参観者 東海電気KK職員ほか。

8月26日（火）雨

雨のため発掘作業を中止。遺物整理を行う。

8月27日（水）晴

立ヶ花城跡調査地の36グリットの表土はぎからの発掘調査も全面に行きわたってきた。午前9時から、県史編纂委員の桐原健・宮下健司先生を現地に招へいし、溝・古墳説・祭祀址などについて、現況解説・指導を得る。高坏、ミニ土器(つば)等出土。調査団長から、立ヶ花表山遺跡現地調査終了届を市教育委員会に提出された。

8月28日（木）曇

立ヶ花城跡と上ノ山窓跡調査(この調査経過は別記)を2組に分れ実施。立ヶ花城跡は祭祀址を拡張調査し、また溝調査に重点をしづら最終段階のため近づいた調査日となつた。刀子・焼粘土塊等出土。溝は長さ10m、巾1.45m、深さ1.0m

信濃毎日新聞花岡中野支局長取材に来所。

8月29日（金）曇

前日に引き続き祭祀遺構と溝遺構の調査実施。石斧・旧石器(黒曜石)・など出土。

参観者 西原徳吉氏ほか。

8月30日（土）曇雨

溝遺構の調査に重点をしづら、全ぼうがでてきた。その他重点地にトレンチ(巾1m、長さ2.7m)を

入れる。溝中から旧石器(黒曜石)。縄文石器・土師器・栗林式土器出土。

参観者 湧井装袋男氏ほか。

8月31日(日)雨

雨のため現地作業中止。遺物整理を行う。

9月1日(月)晴

前日の雨のため溝遺構の調査不能のため、ナラ・クヌギの大株をチーホルダーで抜根し、グリットNo.5・6地点の発掘深さをさけて調査をした。午後県文化課郷道哲章指導主事来所。複合遺構の様相で調査期間が予定期日より長びくことが現実化し、この状況等を中部電力長野支店へも連絡し、経費負担増についても了承を得ることとした。

参観者 芹川善藏氏ほか。

9月2日(火)晴

本日は全員上ノ山窯址調査整理をおこなう。

参観者 酒井清重氏ほか。

9月3日(水)晴

立ヶ花城跡調査へは、午後から4人が行き、溝掘りと、実測をおこなった。調査団長から、上ノ山窯址発掘現地調査終了届を、市教育委員会に提出された。

9月4日(木)晴

本日から、また、全員で立ヶ花城跡調査に入り、グリットNo.22・23にサブトレント入れをおこなう一方、祭祀遺構の測量を実施し、遺物収集をした。

参観者 中部電力職員ほか。

9月5日(金)晴

溝遺構の最終的調査を実施、午後はバックホーにより、掘下げと括巾調査をおこなった。石錘・石斧出土。午後、郷道哲章県教委文化課指導主事が指導に来所。

参観者 東海電気職員ほか。

9月6日(土)小雨後晩

グリットNo.18のローム探り、土壌のセクションとりと溝の北壁調査をおこなう。土層の実測を実施した。高环の脚、土師片多く出土。現地調査関係が終了に近づいたので、現地見学会を8日に設定し、有線放送等により参加者の呼びかけをおこなう。

参観者 北村学氏ほか。

9月7日(日)曇

溝北壁掘き調査を継続、全ぼうが判明したので、10日間にわたっての溝調査を終了した。

参観者 北原宗司氏ほか。

9月8日(月)雨

計画した現地見学会も雨のため翌日に延期した。また、発掘調査についても中止し、遺物整理を行う。

9月9日(火)雨

前日に続き雨のため現地見学会を中止、改めて日時等を設定することにした。なお、発掘調査についても中止し、遺物整理を行った。

9月10日(水)曇後雨

台風13号の影響を受け、南風が強くまた雨のため現地作業は中止し、遺物整理を行う。

9月11日(木)曇

前日までの雨のため現地作業ができないので遺物整理を行う。

9月12日(金)晴

溝内雨水排除のため、水道課から水中ポンプを借用し排水をおこなう。つづいて、溝内整理をし、土層断面の測量を行ない、溝遺構調査のすべてを終了した。

奉観者 中部電力工務部土屋敦調査役ほか。

9月13日（土）晴

バックホーにより、調査範囲の最終調査を行った。管玉・打石斧出土及び住居址検出。

本日で、現地の調査がすべて終了したので、発掘器材の撤収を行ない、遺物類についても整理場所へ移管をした。

#### (4) 調査の整理

9月14日～12月20日出土遺物の整理を実施。(遺物の時代別分類・拓本の作成・遺物の実測・実測図・墨入れ等) この間9月25日県史編纂委員桐原健先生の指導を得た。

なお、9月16日付で調査団長から立ヶ花城跡発掘調査終了届を、市教育委員会に提出された。また、雨のため現地で実施できなかった見学会にかえて、9月26日市民会館会議室において「中間発表会」を開催した。

このように、長期間にわたる今回の立ヶ花城跡等緊急発掘調査は、初期の調査目的を達成することができた。ここに調査協力員として発掘調査に御協力くださった方々の芳名を記し、感謝を申しあげたい。

(敬称略・順不同)

藤沢 昭雄 山田 利昭 小林 徳明 山本 浩之  
池田 八七子 玉木 実 古田 茂 清水 康治  
春原 時次 小林 行保 矢野 忠義 中丸 政範  
鶴谷 康雄 高野 定雄 宮川 洋一 宮沢 功  
豊田 博文 竹内 羊一 玉木 一徳 関塙 千代美  
割田 市太郎

(藤澤 製表雄)

## 2. 遺跡の立地と環境

立ヶ花城跡は中野市大字立ヶ花字表山地籍に所在し、城跡の西側には千曲川が北へ流れ、延徳田園を東西に横切って猿井川が城山のすぐ南側で千曲川に合流する。遺跡の標高は377mから378mであり、高丘丘陵南端に位置するため延徳田園は勿論、千曲川沿いに善光寺平を遺跡から<sup>①</sup>はざ一望できる。さらに遺跡を急な崖地が北側から千曲川、猿井川沿いに取り囲んでいるため、物見台として有利な立地条件であったと思われる。また千曲川は、それまでの川幅の広い流れが立ヶ花より峡谷をぬける急流へと変化する。豊野層とよばれる洪積層の台地に遺跡は立地するため、千曲川の氾濫に影響されることなく、その氾濫源を利用できるという好適な生活圏であったろう。

立ヶ花表遺跡は、立ヶ花城跡の東側の丘陵上に所在し、現在は立ヶ花し尿処理場が建設されている。この処理場建設の事前緊急発掘調査にて、ナイフ・彫刻器・スクレーパー・石刃等の旧石器時代の遺物が検出されている。

つぎの第1表は周辺に分布する主要遺跡表で、第5図と共に参照されたい。(岩戸啓一)

註

1 長野県町村誌 北信篇

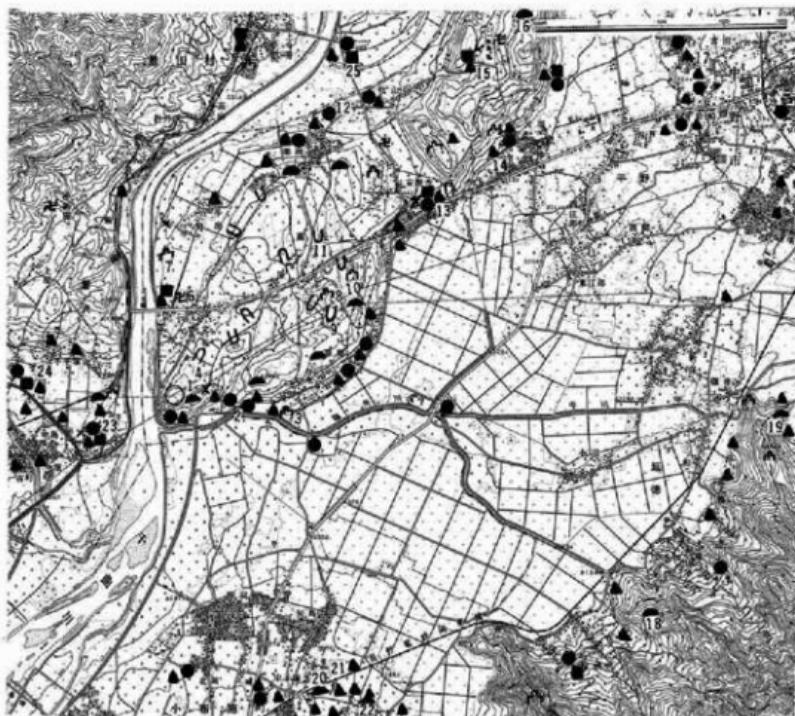
2 金井文司「中野市安源寺・草間出土の弥生遺物について」高井42

3 金井源次・川上元「長野県中野市浜津ヶ池と立ヶ花遺跡発見の先土器時代遺物」信濃19-7

第1表 周辺主要遺跡一覧表

番号	遺跡名	所 在 地	立 地	時 期	遺跡状況及び出土品
1	立ヶ花城跡	高丘立ヶ花島軒割	丘・平地上	歴	槍身・茶臼
2	がまん洞	高丘草間西道雄他	丘 隣	弥・平	弥生(後)勾玉・土師器
3	草間城跡	高丘草間城	平 地	歴	石仏
4	立ヶ花表山廃址	高丘立ヶ花表山	丘 隣	平	須恵器片・半地下式登窓4基
5	立ヶ花	高丘立ヶ花西原段	丘 繩	古	繩文(前)石棺・石鏡・石匕・土師器
6	本誓寺跡	高丘立ヶ花	平 地	歴	
7	牛出城跡	高丘牛出城跡	段 丘	歴	土塁・空塹
8	大久保館址	高丘草間大久保	丘 蔽	歴	石臼・鹿角(刀掛)
9	上ノ山廃址	高丘草間上ノ山	丘 蔽	平	須恵器片
10	茶臼峯發址	高丘草間茶臼峯	丘 上 繩	・歴	有柄石斧・宝鏡印塔(笠)・土師器・須恵器・骨壺・古鏡・骨片・五輪塔
11	坂下窯址	高丘草間(工場団地内)	平 地	平	須恵器・窯津
12	栗林	高丘栗林北原地	平 地	弥～平	弥生(中・後)住居址2・土塙墓2・井戸址1・磨石斧・太形蛤刃石斧・扁平片刃石斧・石繩・石包丁・石鎧・管玉・勾玉・四石・土師器
13	安源寺	高丘安源寺宮裏他	段 丘	先～歴	ナイフ・鄭刺器・石刃・繩文(中・後)・打石斧・磨石斧・石鏡・石槍・石匕・四石・弥生(中・後)・住居址4・住居址(土師4)・土塙墓25・磨石斧・打石斧・太形蛤刃石斧・石包丁・扁平片刃石斧・管玉・铁鎧・土師器・須恵器・古鏡
14	片塙	平野片塙	丘 蔽	平	土師器・住居址1・布目瓦

15	浜津ヶ池	高丘茶林壺池他	丘 腹	先・繩・平	ナイフ・彫刻器・擦器・石刀・磨石斧・打石斧・石鏃・土師器
16	双子塚古墳	平野七瀬新井	丘 上	古	前方後円墳(長78m後円径48m高7.5m前方巾25m高6.5m) 埴輪・鏡・直刀・矛・短甲・土師器・須恵器
17	吉田屋敷下	平野吉田屋敷下	扇 状 地	弥 ~ 古	弥生(後) 土師器
18	蟹沢古墳	姫 備 桜 沢	山 鶴	古	前方後方墳(長39m高4m)
19	金銀山古墳	日 野 新 野	山 頂	古	円墳(21m)合掌型・装身具・鏡・馬具・武器具・擦・陪塚2基
20	中子塚古墳	(小布施町都住宮浦)	扇 状 地	古	円墳
21	中子塚	(〃 中松中子塚境)	〃	弥 ~ 平	弥生(後) 祭祀址・土師器
22	古堂塚古墳	(〃 〃 古 堂)	〃	古	方墳(径33m高3m)直刀・土師器
23	南曾峯	(豊野町蟹沢)	台 地	繩 ~ 平	繩(後) 磨石斧・太形蛤刃石斧・土師器・須恵器
24	立 石	(〃 大倉)	台 地	繩 ~ 平	繩(後) 磨石斧・石劍・弥(後)・土師器
25	南大原	(豊田村上今井)	平 地	繩 ~ 古	繩(前・中) 石鏃・打石斧・磨石斧・石錐・石匕・凹石・石皿・块状耳飾・細形管玉・太形蛤刃石斧・扁平片刃石斧・土師器・須恵器 弥(中・後)・弥生中期住居址3・



第5図 周辺遺跡分布図

×旧石器 ■縄文 ●弥生 ▲土師 ■古墳 △廐址 凸城塙跡 凹寺院跡

### 3. 立ヶ花城跡

#### (1) 地層

古くは「植鼻」と文字をもってあてられていたごとく、遺跡の立地は千曲川と篠井川の合流点へ岬状に突出している。千曲川の影響による堆積で粘土・砂・礫の互層で、豊野層と呼ばれ背斜構造をもつため、地すべりの起きやすい地域である。遺跡一帯は土砂流出防衛保安林に指定されている。ここより東へ約300mの立ヶ花表地蔵では数年前に地すべりが起き砂防工事が施工された。

立ヶ花城跡第2郭の調査地内にポーリング孔を21グリッドの中央部に所在していることを、調査をはじめてから數日後に発見した。そこで、その資料の領布を“中電”に願ったところ8月末日にコピー資料を送ってくださった。“中電”では送電用鉄塔建設の場合は必要に応じてポーリングで地層をたしかめているが、当所のものは野村竹宏氏が担当され、深さは実に18.3mに及ぶものであった。

ポーリング調査はきわめて緻密なものであり、またその結果は科学的に処理された一覧表を作製されて

いる。二三の例をあげると①孔内の水位(9mまでなし)②深度・層厚③10cm毎のボーリング打撃回数等があるが、ここでは資料となるべく単純化して第6図として提示した。ボーリング結果の地層は9層に分類されているので、表層を第1層とし、以下第9層までの呼称とした。第1・2層は今回の発掘調査に関係するので詳述し、以下は概観にとどめたい。

第1層 表土下50cmを指す。シルト質暗茶褐色粘土で、上層には落葉が堆積し、それに続いて5~6cmの腐植土、以下は粘質土である。この粘質土も色調によって二分してもよいところがある。第2層の地盤は多少の凹凸があって、用地内の層は35~50cm巾をもっていた。また、遺構(城跡・祭祀址・弥生住居址等)の所在によつて、第1層に擾乱がみられた。

第2層 表土下50cm~4.2mで層厚は3.7m、茶色粘土層で粘質は強く、堅さは上半分は中位の堅さ、下半分はきわめて堅い土質であった。表土下2.6mより局部的に微粒砂が混入し、表土下2.9~3.2mには風化端の粗粒がわずかに含まれている。

第3層 暗茶色微粘砂層で堅さは中位。第4層 砂・砾(暗茶・褐灰色)の互層で層序を細分すると9層ぐらいに分けることができるであろう。砂は細粒・中粒があり、砾も小~中で、下層は玉石状のものも含まれる。第5層 黄褐色粘土層で堅い。第6層 暗青色の固結シルト。第7層 茶色シルト質微粘砂。第8層 暗褐色固結シルトで特に堅い。第9層 茶褐色固結状細粘砂で2層に分けることができる。以上であるが、貴重な資料をご提供くださった“中電”的ご厚意に心から感謝申しあげる次第である。(池田実男)

## (2) 遺構・遺物

### 1) 旧石器遺物

今回の立ヶ花城跡発掘に際して旧石器として検出されたのは次の4例である。(第7図)

#### 剝片(図1)

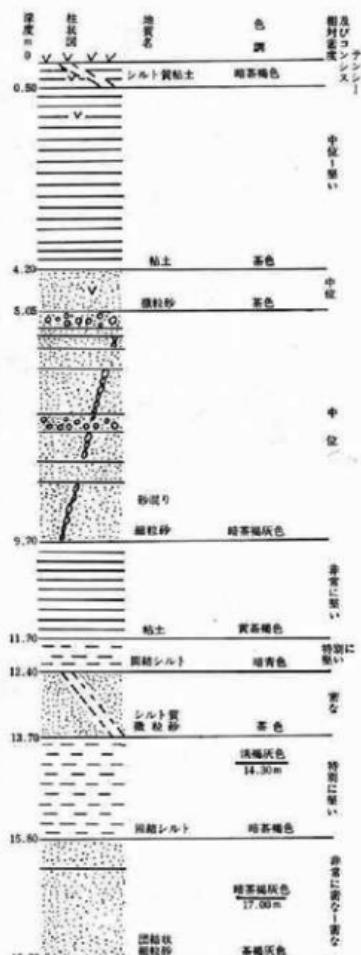
器形の剥片で安山岩製で15グリットの深さ80cmの層より出土した。最初縦方向に打撃を加えて面を作り、次に背面を剝離してその際表面も小剝離をしている。刃部はL形で角の部分が加工され、エッヂが鋭くなつて利器として使用されたとみられる使用痕が認められる。

#### 楔形器(図2)

プリントの河原石を切断剝離しその背面は反対方向より剝離している。円形に近い形状で鋭利な刃部が4で残り6は自然面を残す。21グリットの深さ90cmより出土した。

#### 石刀状剝片(図3)

黒曜石製で、両端から交互に剝離されている。刃部の基部1.2cmが小剝離され、片側も2cmに亘って縱方



第6図 地層図

向に剥離されている。巾を一定にする目的と基部に何か接着させる目的があつたのではないかと思われる。発見地点が15グリットの第一層であるが、後世の造構に擾乱をうけたと思われる。

#### 調製剥片（図4）

黒曜石製で縱方向がやや湾曲してリングが見られる、マイクロ・コア製作の前段階の産物と考えられる。

#### チップ

遺跡の性格上各時代に亘る黒曜石21点、安山岩4点、プリント1点が発掘中確認された。

なお、本遺跡より東方約400mの荒却場建設の時にナイフ、彫刻器、スクレバー、石刀などが出土して金井汲次・川上元氏により調査された（立ヶ花遺跡）安源寺、浜ヶ津地遺跡、飯山市宮中丘陵南端の千刈、柏尾の日焼、大子林、柴村小坂遺跡など高橋桂氏を中心とした研究に依り奥信濃の千曲川流域のナイフブレイド期の遺跡が確認されてきた。本遺跡もその旧石器終末期の人類の痕跡なのである。

#### 2) 織文遺物

今回の調査で発掘、周辺で表採された遺物について略述したい。

##### 中期土器片

3点で附近より表採された。波紋文の1点とヘラで縦横に簾状にえがかれた2点である。

##### 石皿破片

1点が、26グリット、-15cmより発見された。厚さが4cm～4.5cmで多孔質の安山岩で研磨に利用されたと考えられる。

##### 凹石

1点、12グリット発掘。片面5ヶ所の凹みが連続しており、片面は1ヶ所である。これも多孔質の安山岩の円盤を利用している。

##### 打製石斧

2点発見された。5グリットの深さ80cmの発見品は、長さ9.5cm、最大巾5cm、最大厚1.1cmの小形打製石斧で安山岩質で刃先は使用痕が著しい。次は21グリットより発見されたもので頭部と先端の刃部が中途より折損している。現存長さ7cm、最大巾5.5cm、厚さ0.9cmで安山岩である。

##### 石錐（第8図）

1個4グリットより発見した。安山岩で長さ6cm、巾5.1cm、厚さ1cm前後の楕円形の河原の転石を縱方向の両端に巾1.8cm、最大凹部0.1cmの凹みをつけて縫紐をくくりつけた使用痕を残している。

##### 石鎌（第8図）

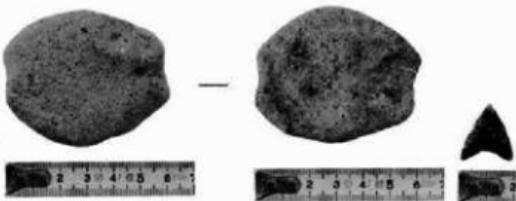
黒曜石製で9グリットより発見された。側面の長さが2.3cm、2.4cmで底辺の長さが1.95cmで刃線が丸みを帯び抉りは0.3cmで両面より丁寧に打削離されている。

##### 石匙

粘板岩製で正三角形で復原寸法は底辺6.3cm、高さ4.6cmで頂点にツマミのついた通有品で附近より表採された。片面が欠損していて



第7図 旧石器遺物



第8図 織文遺物

底辺の刃部が著しく使用され磨滅・剝離されている。

#### 参考文献

- 1) については宮下健司氏の御教示を得た。
- 金井汲次、川上元「長野県中野立浜ヶ池と立ヶ花遺跡発見の先土器時代遺物」  
信濃19.7 昭和42年
- 中野市教育委員会「安源寺1」昭和42年
- 柴村教育委員会「柴村小坂遺跡緊急発掘調査報告書」昭和51年
- 「新編 瑞穂村誌」昭和55年
- 千曲川水系古代文化研究所編「編年」昭和55年

(植原長則)

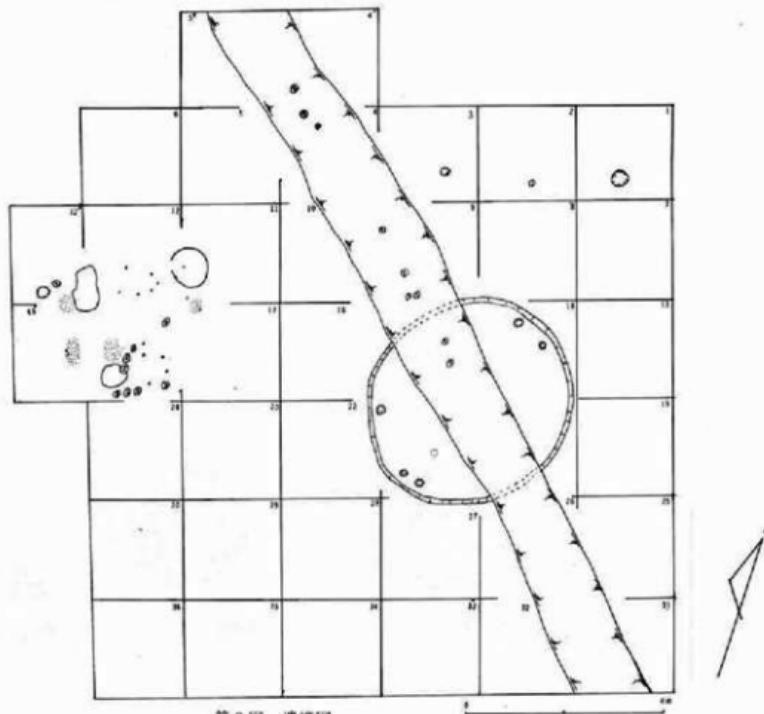
#### 3) 弥生遺構・遺物

##### ① 遺構

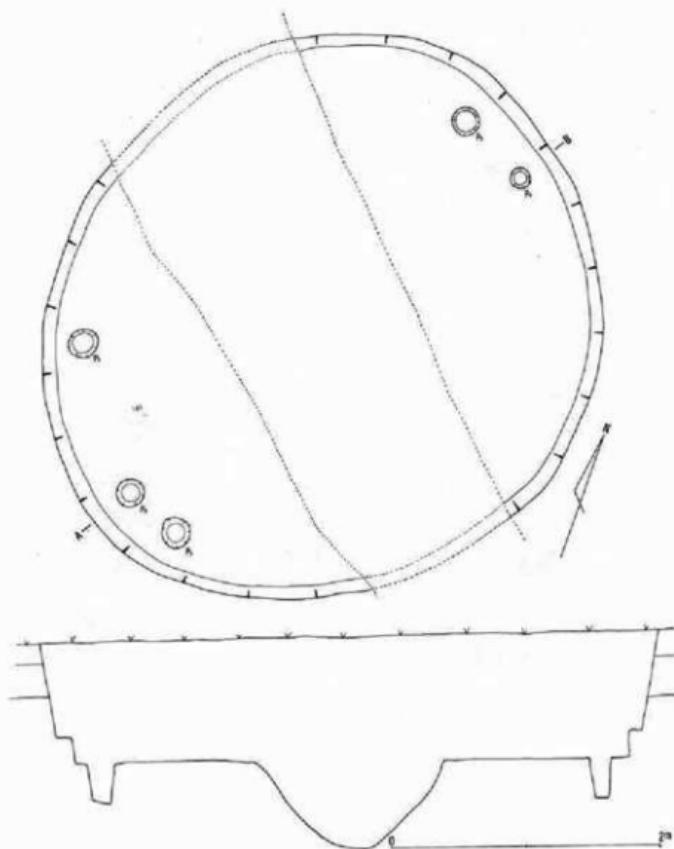
第2郭のほぼ中央に、弥生中期の堅穴住居址を検出した。調査地は雑木林を伐採しての調査であり、くぬぎ、樅等の大木の株根が多く調査は困難を極めたこともあって、長大なU字状溝を掘り下げ壁面を確認している段階で検出したものである。このU字状溝が住居址の中央部を約1m幅に東西に掘られているため完全な形での検出ができなかった。

規模は直径4mのほぼ円形プランを呈し、地表下90cmが床面となり壁高は20cm程度である。

柱穴状ピットを5個検出したが径20cm深さ25~30cmの小型で、南に3個( $P_1 \cdot P_3$ )北に2個( $P_4 \cdot P_5$ )



第9図 遺構図



第10図 弥生住居址実測図

それぞれ並列している(第9図)。U字状溝によって切られているため、溝内にも柱穴状ビットが存在した  
かも知れない。円形プランの住居址は栗林道路で1戸、南大原道路で3戸調査されている。

## ② 遺 物

### 住居址内出土遺物（第11図1～8）

ア 管玉(1) 住居址北端のビットNo.4の蓋で、住居址床面で、地表下90cmから出土した硬玉製管玉で、  
青緑色を呈し、長さ12mm程2mmで孔径1mmの細い穴が穿孔されている。

イ 有柄打製石鏃(7) 住居址東寄りの地表下90cmから出土した。黒曜石製で柄の先端が欠落しているが、  
現長2.7cm、最大幅1.5cm、重量1.8gで、形状、打痕も整い良品である。

ウ 打製石斧(8) 住居址の南端で、地表下90cmから出土した。長さ13.8cm、幅6.2cmの粘板岩製で荒い  
剥離ではあるが刃部は丁寧に打製されている。

エ 壺形土器（2～6）

2は住居址内の中央からやや東寄りで地表下85cmの位置から出土した壺の底部破片である。底径11

cmで胎土焼成とも良好であり、黄褐色を呈している。

3は縦文を付し、へら状工具によって横に沈線を描き、その間に刺突紋を付している。

4～6は、くし状工具で紋様を付している。

発掘調査地及び周辺出土土器(9～27)

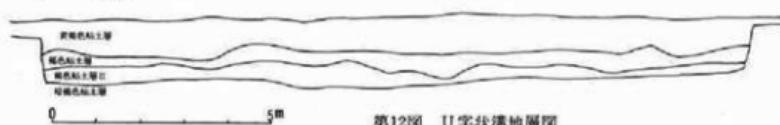
- ア 瓢形土器(22) 第2空巣より表面採集したもので、瓢の下部破片である。底径4.1cmで中央に径0.7cmの空があり、内側には一部食糧のこびりつきと思われる跡が残っていた。外内側とも黄褐色で胎土焼成とも良好である。
- イ 瓢形土器(9～16) 地は縦文を付し竹べらで沈線を描く。9～11、13、14は刺突紋を付し、16は径1.3cmのボタン突起を付けている。
- ウ 瓢形土器(17～21、23～27) いずれもへら状工具によって直線又は波状線の文様を付している。(小野沢 捷)

#### 註

1. 長野県教育委員会編「下高井」昭和28年  
2. 豊田村教育委員会「南大原遺跡」昭和55年



第11図 弥生遺物実測図



第12図 U字溝地層図

#### 4) 祭祀遺構・遺物

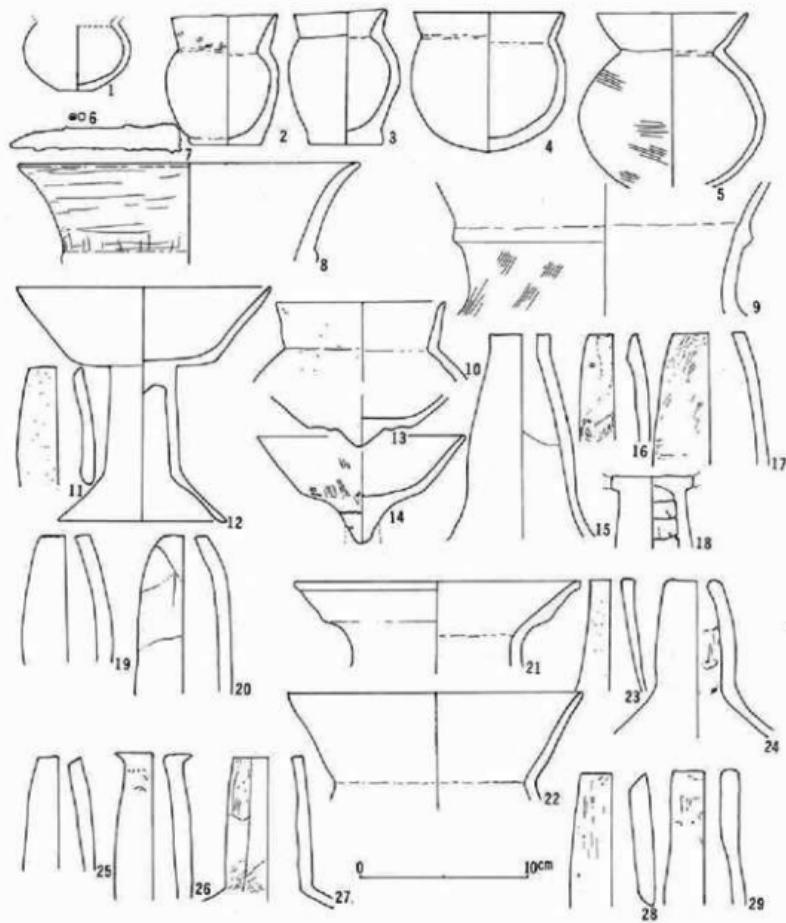
##### ①遺構

第2郭の平坦面は約460m<sup>2</sup>で、その西端には中央部の地表下20～30cmで東西3.4m、南北3mの範囲に遺物が出土した。

遺物の様子から祭祀址と推定したが、祭祀そのものを示す遺構の検出はみられなかった。(第9図)(第17図)

この祭祀址より東へ約1.5mの所から。

第2郭のほぼ中央部を南東から西北にはしる長さ16m、幅1.2～1.4m、深さ1～1.3mのU字状の溝が強粘土に掘り込まれており、炭化物や細土器片が混入していた。(第12～13図) この第2郭の平坦地を南東から西北に真すぐ横切っているものと思われ、U字状溝は弥生中期(栗林式)堅穴住居址の中央部を切ってい



第14図 祭祀遺物実測図

ることから、それより時代は下降するものである。(第10図)

なお、限定された調査ということもあってU字状溝と祭祀造構の関連等について明らかにすることができなかった。(小野沢 捷)

## ②遺物

今回の発掘調査による祭祀遺物の数量は、第2表のとおりである。

第2表 祭祀遺物表

種別	小ガラス	刀子	壺	手摺土器	高環片	壺片	瓶片	焼土塊	土器破片	
数量	1	1	1	3	38	25	37	12	57	618

ア 増(第14図1) 口縁部を欠き、頭部までの高さ3.9cm、胴径6.4cmのミニ増で、口縁は短く立ち上っていたものが欠けたものと思われる。胎土焼成とも良好で、内外とも褐色を呈し、底は径2cmである。

イ 手摺土器(2~4) 数少ない完形品であるが、胎土焼成とも粗で、2次火焔にあつているため所々に剥落があり、色は暗褐色を呈している。

2は壺形で、高さ7.7cm、口径6.3cmである。3も壺形で、高さ7.9cm、口径5.6cmである。4は丸底の鉢形で、高さ8.3cm口径8.9cmである。

ウ 壺形土器(5, 8~10, 21, 22)

5は底部が欠損しており、胎土焼成とも粗で、2次火焔によって剥落が甚だしい。8~10, 21, 22は口縁部片で、胎土焼成とも良好であり、外側は褐色、内側は黄褐色で、へら磨きの跡がある。

エ 高環(11~20, 23~29) いずれも2次火焔にあつて、また供獻終了後は破碎されたためか完形品はない。胎土焼成とも粗であるが、脚は比較的残っている。U字状構からは12, 14, 17, 20, 24~26, 29が検出された。中子塚境遺跡の祭祀遺物より古く和泉期頭初のものとみた。

オ 小玉(6)

ガラス製のコバルト色を呈し、1ヵ所気泡痕があり、重さ0.14g、孔径は1mmである。弥生時代のものと思われるが、伝世出土(鳥羽山遺跡一丸子町)の例があり、検出レベルが同じであることから、この祭祀址に關係あるものとみた。

カ 刀子(7)

柄の部分を欠き、現長10cm、最大幅1.2cm、重さ13.6gで、錆化が甚だしい。

キ 焼土塊・焼石・木炭片等

焼土塊は4ヵ所から検出され、その周辺には木炭片、灰が多かった。川原石は火焔の跡があり、土器片の周囲にもあった。祭事終了後の浄化によるものと考えたい。(小野沢捷)

註

1. 小布施町教育委員会「中子塚境遺跡」昭和51年

## 5) 城跡・遺物

高丘台地は中世の城館跡の密集地帯である。これらが展開する様相は、あたかも善光寺平最北端に浮かべる城櫓の威風を呈し、大小河川と台地の丘頂・丘尾・河岸段丘等の自然地形を巧みに利用した要塞地域となっている。中野市内には20余所に及ぶ城館跡遺構のうち高丘地区には8つの遺構(第5図1立ヶ花城跡、安源寺城跡、安源寺城山、大保城跡、牛出城跡、3草間城跡、大久保館跡、10茶臼峯跡等)等がある。しかし、これらの構築の経緯や規模等については、昭和49年に記録保存のため発掘調査が実施された茶臼峯跡以外は全く不明である。文献資料も稀薄で、田部誌、田町村誌等のなかに口碑をとどめるものが僅かにあるだけである。

立ヶ花城跡については高丘村誌・長野町村誌北信篇に記録され、ここでは後者のものを掲げよう。

東西十間、南北十五間本村渡船場の東南、字表山千曲川端に突出する所の頂にあり、弘治・永禄年間、当國川中島合戦の際越軍斥候の地と云う。此地登臨すれば地勢西南に開き、凡七里を距てて川中島眼中に

落つ、土人呼で城山と云う。今民有に属す。其東に字城ノ腰と称する耕地あり。

明治初期の書上であるが本跡の立地と規模や戦国末期の川中島合戦の舞台となつたことを簡明に述べている。ここで庄候が注目され、「茶臼峯」では第1郭は監視所に用いられた構えであろうとしている。南より北進する軍の動きを知るには最適地で、ここからは大久保館跡・茶臼峯砲跡が展望され、さらに壁田城山を経て飯山城へ最短距離で連絡ができる。

本跡の丘陵東約300mには番所があつて小林角兵衛氏の屋敷がこれにあたり本陣と呼ばれており、東側の土塁は消滅したが、南側と西側の一部に高い土塁が残っている。前面(南)には篠井川の流れがあつて要害の地である。(金井汲次)

#### ①城跡

善光寺平を自由奔放蛇行して北へ流下する千曲川は本跡の裾で峡谷に入つて流路は一定し、また、篠井川は西へ流下して本跡直下で千曲川に合流している。なお本跡西下には渡船場跡が残つており、現在の立ヶ花橋(鉄橋)が北約500mの所へ架設されるまではここに船橋があつて、古くからの交通の要衝であった。川西の対岸には手子塚城跡(豊野町蟹沢)があつて軍事上の要地であった。

千曲川は氾濫と浸蝕によつて現地形を形成したのであるが、丘頂の突端にある本跡は天然の要塞地形をなしている。ここに僅かの工作をほどこして物見台を構築したのである。遺構は全長約70m、巾18~51mの細長い三角形の小形の砦跡で、平地からの比高は約50mであるが南・西・北は急傾斜で登攀はまことに困難である。

遺構の概要は第3表のごとくであるが、第1郭は物見台、第2郭は哨兵の詰所、第3郭は詰所兼物資集積所としたのであるまい。今後の総合調査によって究明しなければならない。

発掘調査は第2郭に“中電”が送電用鉄塔建設予定地の調査のみにとどまったために、遺構の一部をかいまみるにすぎなかつた。

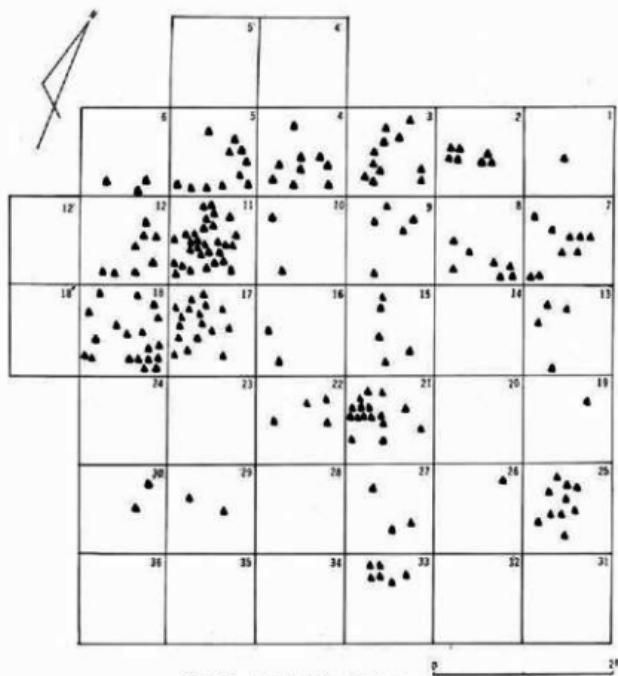
ア 土塁 第3表に見られるごとく、土塁は第1郭~第3郭の北側に構築されていた。第2郭の場合は第2空塗の土砂を掘り上げて積み重ねている(第16図)。第1層5cm・黒色土(腐植土)、第2層30cm・褐色粘土(少し砂まじり)、第3層13cm・黄褐色粘土、第4層40cm・黄褐色土に黑色土まじり(ところどころに茶色粘土塊を含む)、第5層20cm・黒色土。以下第6図で述べた第2層の茶粘土で、これが地山である。長年月の風雨にさらされた土塁は第2層において崩れの跡が甚だしかつた。

イ 柱穴 柱穴状ピットは3カ所から検出された。1グリットのものは径50cm、深さ30cm、2グリットのものは径15cm、深さ19cm、3グリット分は径20cm、深さ32cmを茶色粘土層に掘りくぼめてあつた。大小ではあるが、ほぼ東西に並びピット間は2m(約1間)であったことから北側に掘立小屋が設けられたかとも推定される。詰所の小屋とすれば本跡にかかるものであろう。

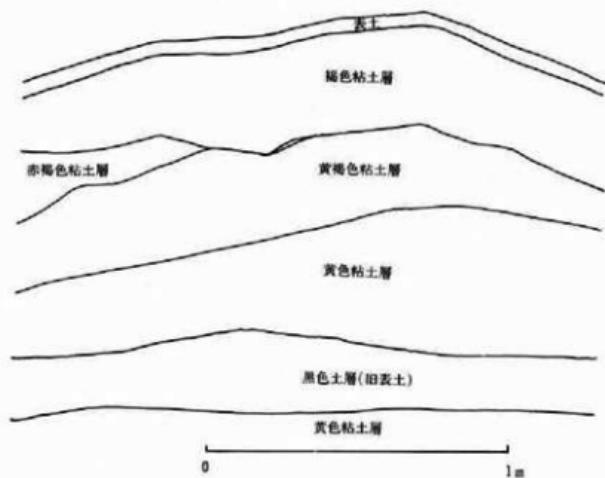
第3表 城跡遺構表

標高 (m)	郭内 面積(m <sup>2</sup> )	土 塁				空 塗				概 要
		長さ (m)	高さ (m)	巾 (m)	構 造	深さ (m)	上巾 (m)	底巾 (m)	構 造	
第1郭	378.3	170	東21 西12	0.4	1.3	ほば塀形	A 4.5 B 2	4.5	1	底U字形 西へやや傾斜、東側に土塗遺構あり (円形、径 2.5m 高さ40cm)三角点あり
第2郭	377.6	460	41	1.2~ 1.5	6~ 7	用地北側の一 部は崩れる	A 3.2 B 1.8	7.5	2	底U字形 ほば平塁、用地内発掘面積 155m <sup>2</sup>
第3郭	377.2	1,048	51	0.5~ 0.6	2	ほば塀形	な	し		郭北半分は仮設電塔建設のため現状 は変貌

Aは空塗西側の高さ、Bは東側の高さを示す。



第15図 土師片出土分布図(第1層)



第16図 土壌地層実測図

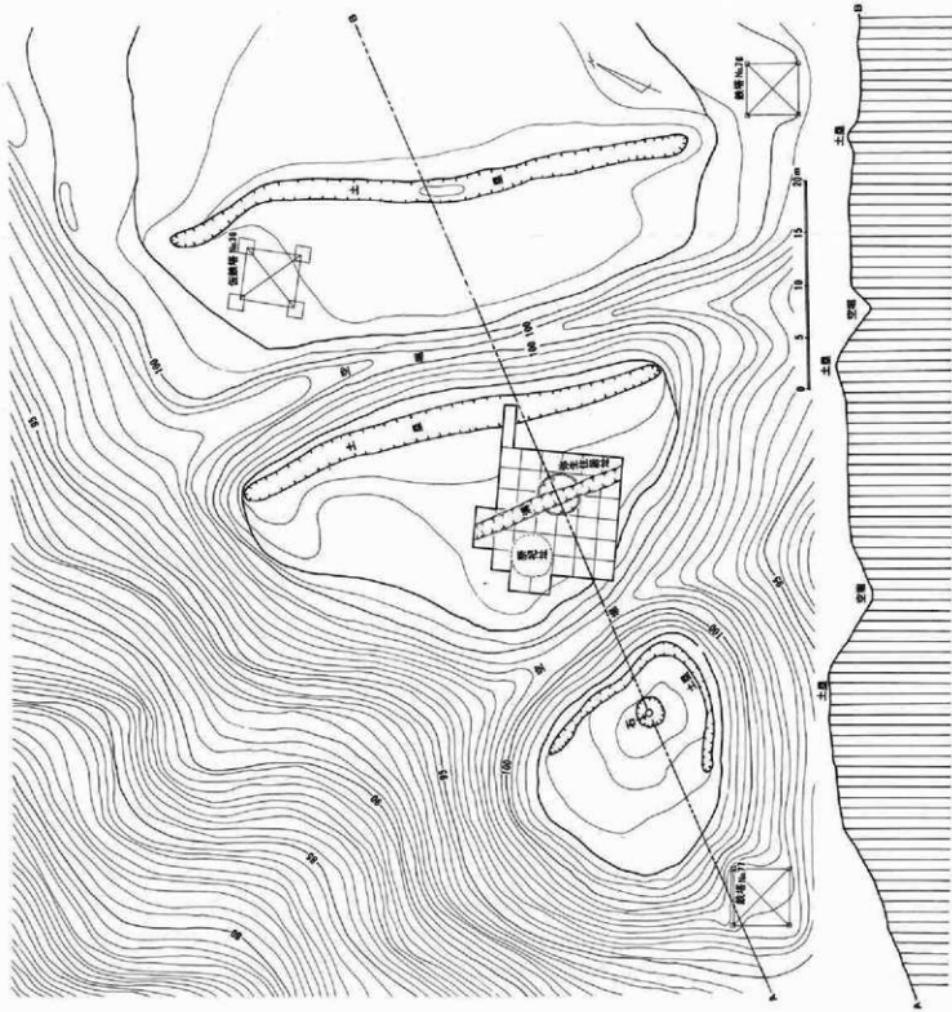


图24 24# 五指山头测区

## ②遺物

第2郭はナラを主体にクヌギ等と雜木とクズ・フジが繁茂していたようであるが、芽吹き前に伐採され、幹や枝は郭の南・西・北に片付けてあった。発掘地内には大小の古株が30株近く点在し、また、クズ・フジの根がびこっていて、これを除去するのに作業は難渋した。グリット（2×2m）を36設定し、北の東隅から番号をつけて調査をはじめた。第1層（表土下10~30cm）から出土した遺物は第4表のとおりである。

黒曜石片 和田紳方面からもたらされたもので割合19点を得た。弥生・縄文時代、またはそれ以前のものが、弥生住居址、祭祀関係の溝、空塗構築時に攪乱されて第1層に混在したものと思われる。

弥生土器片 弥生中期の土器17点の検出をみたが磨耗が甚しく細片であるため器形をうかがうことは困難である。

ア 土器器片 第15図は土器器片が第1層から検出したものの分布図である。本郭構築に攪乱されたものでの祭祀遺構周辺の出土の密度が高い。いずれも磨滅が甚だしく、第4表にみると器形の察知できるものは12.7%にすぎず87.2%は不明の細片であった。祭祀関係の土器器片が大部分であろうが、あるいは中世のカワラケ等も混在しているかとも思われる。

イ 古銭 元符通宝1枚、文久永宝1枚の発見があった。元符通宝（北宋哲宗1098年~1110年）は10ヶ

第4表 第1層出土遺物

グリット番号	弥生土器片	土 器 片				その他の遺物
		高环片	蓋片	袋片	細片	
2		1			8	石屑1
3		2			17	#
4	1	1	1		15	
5	1	1	1		12	黒曜石片3 石屑1
6					3	# 1
7	1				6	# 7
8					8	焼石片1
9		1			5	
10					4	元符通宝1
11	2				2	黒曜石片1
12					4	# 1
13					6	黒曜石片3
15					6	銅 鈴1
16					1	文久永宝1
17	2				1	
18					21	
19					1	
21	2	5	5	2	21	打石斧1 黒曜石片1 ボーリング石1
22	1	1			1	
23	2				5	
24	1	1			6	磁 石1
25	1	1			5	
26					1	黒曜石片1 石屑1
27	1					磁 石1 石屑(真岩)1
28					2	
29	1				2	黒曜石片4
30	1	1			1	
合計		17	15	7	2	164

リットの地表下15cmから得た。径2.4cm、重さ2.33gで銘文も明瞭で1枚の宋錢(中国)ではあるが「茶白峯」の土里内から1枚が出土していることから、同時期の鑄造が考えられる。文久永宝は径2.5cm重さ2.98g、背文は波形で16グリット地表下10cmから検出した。江戸時代末期(1861~1863年)の文久年間の鑄造で金質は良くなく水の字の下に小穴があいている。杣仕事か、猪廻の折に落したものであろう。

ウ 砥石 24・27グリットから沼田石質の砥石片2点を発掘したが、原形は短冊型の中砥で、よく使用したため中程がくびれて、くびれた部分から折れている。

エ 銃弾 15グリットの表土下10cmから径1.1cm、重さ10.16g、黄灰色に錆びた鉛製球形の銃弾1個を得た。また、周辺調査の折に第3郭から径1cm、重さ9.65g、白色の銃弾を表検した。

オ 火打石 石層5点のうちに石英質の石層1片を検出したが、角に使用痕があるところから火打石と考える。

カ 釘・鉄片 手打ち鍛造の鉄製角釘で比較的小形のもので、建造物にもちいられたとは思われない。また鉄片の検出もあったが小破片のため種類や用途は不明である。(金井汲次)

#### 註

1・2・3 中野市教育委員会「茶白峯—中世の砦遺跡を中心として—」昭和49年

#### 6) 周辺出土遺物

ア 土器部 <sup>(1)</sup> 高見沢信秀氏(安源寺)の祖父故伴藏氏は延徳沖治水会の役員で、藻ノ井川改修工事に参画され、工事人夫が川底から発見した出土品を収集された。(第18図)1・2は高環の脚片、3・4は器台片で脚に孔があつて和泉期のものと推定される。5・6は環で国分期のものである。島軒割・がまん測道跡に関係あるものと思われる。

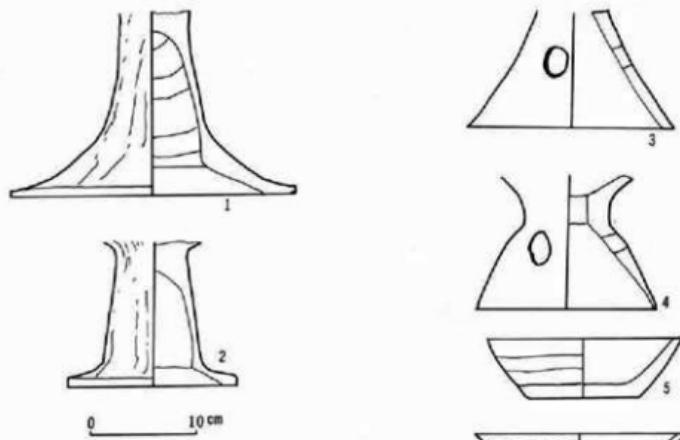
イ 槍身(第19図1) 大正時代初期に表山地籍(山林)から通口徳吉氏(立ヶ花)の祖父故末吉氏が発見されたものである。

現長30.8cm、槍身部22.5cm、刃巾2.1~2.4cm、柄と槍身との接合部は漆でかためてあったのを金槌でたたいて分離しようとした時に、目釘の孔の部分から折れ、折れた部分と、槍身全体を自分で磨研したという話してある。槍身巾は2.5mm、残っている目釘孔は径5mm、槍先から刀の中央部の片刃に5か所の刃こぼれの痕がある。鍛造はかなり良好のものと思われるが、現況は全面鏽でおおわれている。ウ 石製茶臼(第19図2) 千曲川の堤壙に統いて、藻ノ井川水路改修と自動開閉式の水門建設のため、延徳沖治水会頭会長故金井乙之丞氏は經理担当も兼ねて當時現地におもむいていた。水門下の川底から昭和6年春に凝灰岩質茶臼の上部を発見された。

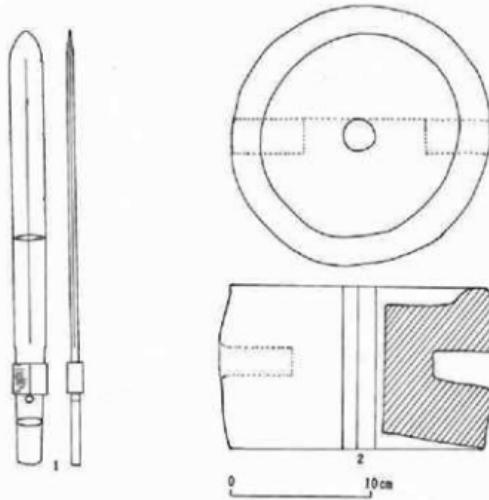
直徑19cm、器高11.5cm、中央部に径2.3cmの孔をうがち、引き手挿入孔(深さ4.5cmと6cm)が対称に肩部につくられている。臼の上面には巾2.2cmのあごがめぐり、下面には8分角の割合に深めの刻目がある。金井文司氏が所蔵している。(池田実男)

#### 註

1. 中野市教育委員会「安源寺」昭和42年



第18図 周辺出土遺物実測図(1)



第19図 周辺出土遺物実測図(茶臼・箱身)(2)

## 4. 立ヶ花表遺跡

鉄塔No.72の建設予定地は、立ヶ花表遺跡の最北端にあり、北信保健衛生施設組合の衛生センター（し原処理場）事務所の北側で、農道をへだてた場所に位置する。

急な北傾斜地の先端で、すぐ北は2m程の段落差となっているため遺跡の立地するとは思われない。遺跡確認調査は、鉄塔の脚となる位置へ2m×2m区画の4か所にトレーナーを入れ、それぞれ1.6mまで掘り下げた。

土質は黄褐色の砂混入強粘土質で、所々に黒色土と2~5cm程の礫が混入し、以前に擾乱されていた。衛生センター建設によるものと思われ、遺構、遺物の検出はみられなかった。  
（小野沢　捷）

## 5. 上の山第1号窯址調査

### (1) 調査の経過

上の山窯址群（遺跡番号9）は古くから須恵器片の表面採集が行われ「下高井」にも登載され、数基の登窯が存在すると推定されていた。草間丘陵のなかには、いくつもの小丘陵が起伏し、本窯址群のある上の山地籍は、高丘小学校一下組線と高丘小学校~高屋敷線の中間にある小丘陵の東と北の斜面の果樹園地帯である。なお、近傍には大久保窯址群・大久保塙等が所在し、古代中世の遺跡が点在している。

中部電力株式会社は、上の山1899-2番地の送電用鉄塔（No.67）の立替工事のため現状変更のやむなきにいたり、中野市教育委員会は緊急発掘調査を実施し、記録保存をはかった。発掘は立ヶ花城跡調査団のスタッフで実施した。発掘結果は灰原のみの検出にとどまったが、本窯址群最初の調査によって窯址の存在を確認したことから上の山第1号窯址と呼ぶことにした。

8月28日（木）曇 発掘地の東側下にある西沢真氏の農作業小屋を借りて調査団本部とし、設営する。用地内の草刈り、桟の抜根をすませて表探ると須恵器数点と打製石斧1点を得た。用地内の斜面に3本のトレーナー（巾1m）を設定し、窯址の確認につとめたが予想地には発見されず、作業を終る直前に第2トレーナーの左端で、用地の境の部分に灰原遺構を発見した。参観 酒井清重氏ほか。

8月29日（金）曇 灰原の拡張を続けると甕の大片をはじめ各種の須恵器片とともに窯津・焼土・木炭片・灰等が窓内から搔き出した状態で検出することができた。灰原の周辺約55m<sup>2</sup>の探査を続けたが、用地内には窯址が存在せず、酒井潮幸氏の桃畠へ延びていることが判明した。測量・写真撮影をすませて作業を終了する。参観 酒井潮幸氏ほか

### (2) 遺構

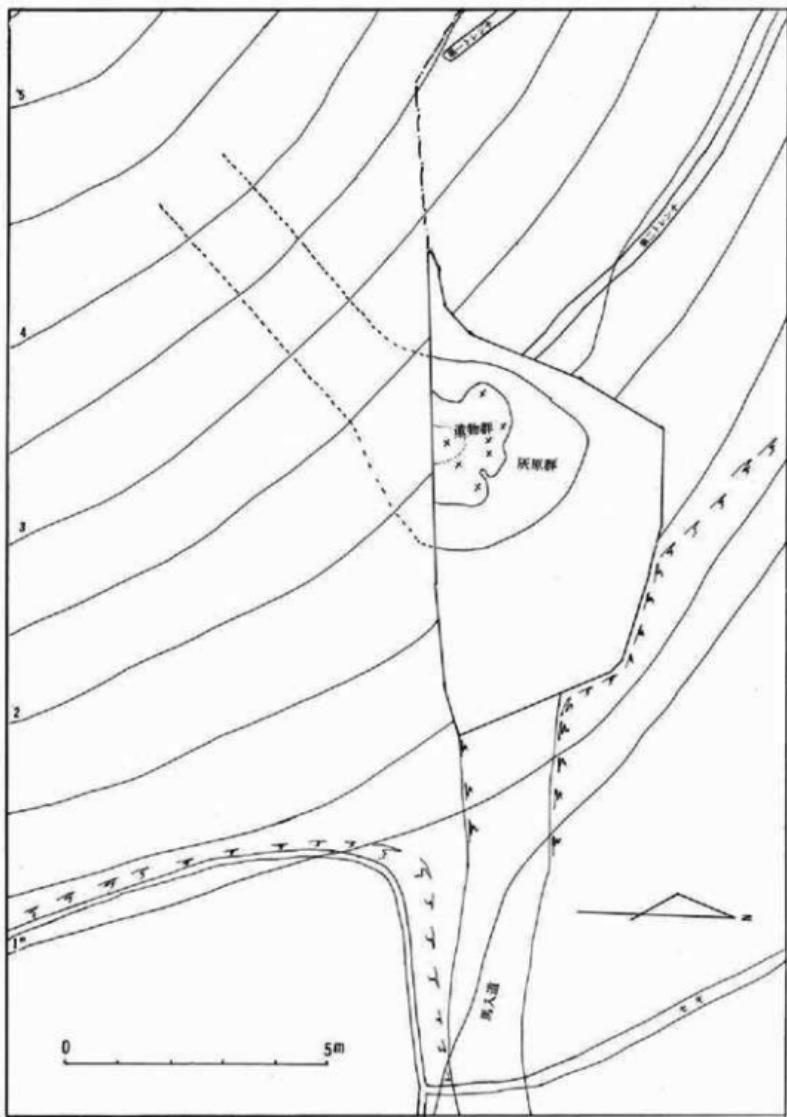
第2トレーナーの左端に発見した灰原を5m×4mに拡張し、用地内に灰原を検出した。灰原は2.3m×1.5mで残余は用地外の桃畠へ延び、その上方に窯址が続くものであろう。表土は比較的薄く約20cm、その下に灰原（第21図）の層30cmがあって、須恵器片・窯津とともに木炭片・灰等が混在していた。

桃畠（地主酒井潮幸氏）の探査の許可を得てボーリング杖によって窯址を探すと、巾1.5m~1.7m、長さ約9m~10mの半地下式登窯が主軸をほぼ東西にとり、小丘の傾斜20°とほぼ同角度に架設されているものと思われる。酒井氏はこの際調査をすすめてはと申されたが、後日あらためて完明することにした。

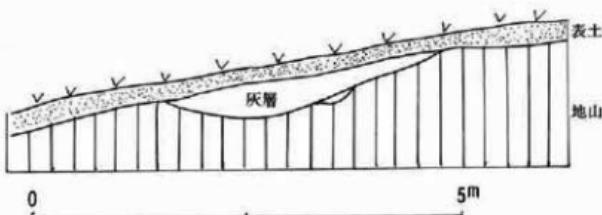
なお、本窯址群に隣接して大久保窯址群が点在し、草間丘陵中もっとも良質粘土地帯であること、さらに水源にもめぐまれ古代住居址群の立地には好条件をもち、草間村の前身大久保17軒の伝承のあるところでの、須恵器生産の工房址の存在をもともと有力に想定される地域である。

### (3) 遺物

灰原から検出した遺物と表面採集によるものは第1表とおりで、須恵器片は809点に及ぶ。須恵器片の器種別の割合は、比率の高い順から壺30%、甕26%、蓋21%、壺19%、高台付壺4%となる。壺・蓋の率の



第20図 上ノ山窯址灰原実測図



第21図 灰原断面図

第5表 遺物表

種別 区分	壺 片			甕 片				壺 片	高台付 环	高 片	蓋 片	窓 薄 片	木 炭 片	燒 土 塊 片	
	口 縁	底	細 片	口 縁	底	柄	底 片								
瓦器	36	9	93	9	3	3	1	194	243	28	6	163	505	86	45
表 拨	6	1	10									4			
計	42	10	103	9	3	3	1	194	243	28	6	167	509	86	45

第6表 出土遺物表

遺 物 番 号	器 種	法量 (cm)			形態上の 特 徴	手 法 上 の 特 徴	胎 土	色 調		出土の 状 態	備 考
		器 高	口 径	底 径				外 面	内 面		
1	壺		45		側壁彎曲	ロクロ整形、たたみ目文	良好	茶褐色	茶褐色	灰 色	自然物
2	#		50		口縁外反	#	#	#	#	#	#
3	壺	12	23	10	#	#	#	褐色	褐色	#	ヘラ切底
4	蓋	3		13	つまみ留平	#	#	茶褐色	茶青色	#	旋成ひずみ
5	#	2.8		13.5	#	#	#	灰青色	灰青色	#	
6	#	3.1		14.5	#	#	#	茶青色	茶青色	#	
7	#	3.1		13.8	#	#	#	黑青色	黑青色	#	
8	壺					# たたみ目文	#	青褐色	青褐色	#	胴部のみ
9	高台付 壺	6.5	11.5	9		#	#	灰青色	灰青色	#	底部のみ
10	高台 付環			8		#	#	#	#	#	
11	#			8	素切底	#	#	#	#	#	
12	#	4	11.5	8		#	#	墨青色	墨青色	#	
13	环	4	13	7.3	素切底	#	#	灰白色	灰白色	#	
14	#			6.5	ロクロ整形	#	#	黑青色	黑青色	#	
15	#					#	#	灰青色	灰青色	#	
16	甕				液状文	#	#	黑青色	黑青色	#	口縁片
17	#					#	#	#	#	#	
18	#				厚手(1.3cm) たたみ目文	#	#	#	#	#	
19	#				うす手	#	#	#	#	#	
20	#					#	#	#	#	#	
21	#				厚手(1cm)	#	#	#	#	#	

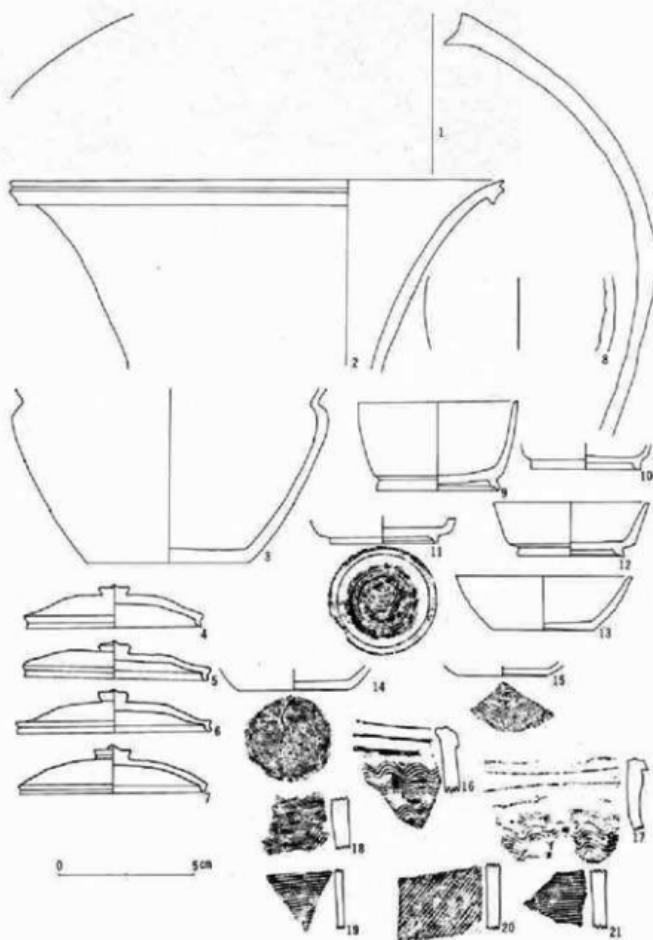
高いことは、これまでにこの地域で調査された例のとおりであるが甕の率の多いのは異例のことである。今後本窯址の発掘調査のあかつきに明確になることであるが、大甕片は焼成台として使用したものと考えられる。甕片の多くは二次火焔によって自然釉がにじみ出ているところからも焼成台としての役割を果したものと推定する。

次に第22図に示した遺物について述べると第6表のとおりである。

灰原から検出した甕片は大小あわせて509個にも及び、その多くに甕を切ってスサを作り、粘土とねりあわせ、ドーム状天井が作られたものと思われる。この甕片によって本址の構造は半地下式登窯と推定した。

木炭片は大小86個の出土を見、マツを主体にクヌギ・ナラを薪材としていたことが判明した。

(金井文司)



第22図 灰原出土遺物実測図

第23図 灰原写真



第24図 上の山廬址発掘風景

本廬址の構造は不明であるが、検出された遺物の製作技法・形態から、この地域における既調査廬址群との比定によると、操業は9世紀初期すなわち平安時代初期の年代をあてたい。

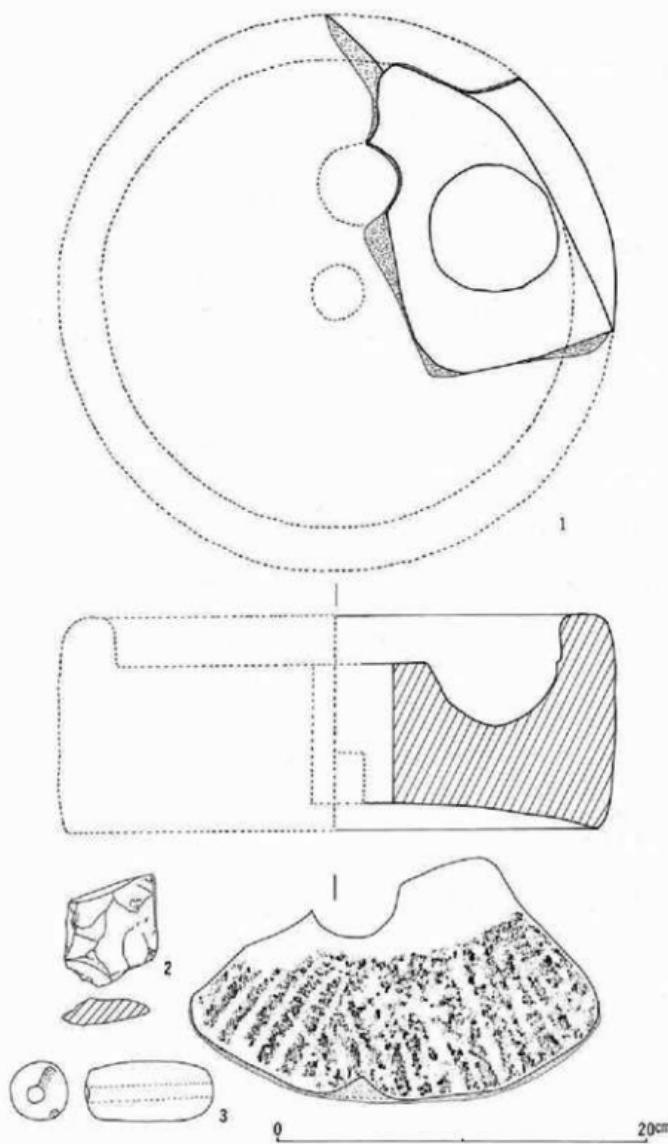
#### (4)周辺出土遺物

- ア 打製石斧 昭和51年4月大久保館址北端でアスパラ畠の中耕中に小林正雄氏が採集された飛鳥時代の遺物である。青灰色の粘板岩製で基部は欠失し、刃部のみである。(第25図2)戦時中この館址一帯の開墾があった、井戸址南側からこの種の打石斧が発見され高丘小学校に保管されている。
- イ 須恵器片 上の山・大久保地籍から採集された須恵器は高丘小学校に多量に保管されている。一部は「下高井」に紹介され、その後高丘小学校のクラブ活動を指導した田川幸生氏によって採集された。今回の表面採集では壺片17点、蓋片4点を得た。
- ウ 土製管状土錐 (第25図3) 小林正雄氏がアスパラ畠の中耕中に地下20cmのところから、昭和51年4月に発見されたものである。長さ7.3cm、径3.6cm、孔径8~9mmの魚掛用の土錐で、胎土焼成とともにあまり良好とはいえない。栗林遺跡からも同形のものが国分寺の土師器とともに出土している。
- エ 石臼片 (第25図1) 本廬址下の農道付近から表面採集した。剥片であるため全貌は明確でないのが惜しまれるが8分角の割み目を持つ凝灰岩質石臼の上部破片である。同形同種のものは建応寺跡から出土している。中世後期のもので館址に関係するものであろう。
- オ その他、廬址下の平地の畑から中世末と推定する擂鉢細片1点を表採した。また、発掘調査中に参観された酒井清重氏が、本廬址付近から発見された石器製作中の剥片と思われる比較的大形の石層2点を提供された。

(金井文司)

#### 註

- 1 長野県教育委員会編「下高井」昭和28年
- 2 大川清・金井徳次「長野県中野市草間廬業遺跡」信濃16~11昭和39年
- 3 金井徳次「中野市立ヶ花表山古廬址調査」高井24 昭和48年
- 4 金井正彦「中野市草間茶臼堀第7号廬址調査」高井25 昭和48年
- 5 中野市教育委員会「茶臼堀」高井30 昭和49年
- 6 中野市教育委員会「建応寺跡第一次発掘調査」高井46 昭和54年
- 7 " " 「建応寺跡第二次発掘調査」高井50 昭和55年
- 8 " " 「栗林遺跡確認緊急調査報告書」昭和55年



第25図 周辺出土遺物実測図

## 6 むすび

山城は山林地帯であったことと雨季と台風にみまわれたため調査は難済した。立ヶ花表遺跡は遺構・遺物は皆無。上の山窓址は灰原のみの検出におわった。限られた期間と用地内のため遺跡の全貌は把握するにいたらなかったのである。しかし次に述べるが如き一応の成果をあげることができた。

### 1. 立ヶ花城跡

(1) 物見跡 小規模で単純な遺構であった。第1層(表土)からは中世末の古銭・鉄弾・砥石等の検出を見、周辺既出土の槍身・茶臼は本跡にかかるものであろう。本跡の構築は草間氏によるものであろうが、永禄4年9月9日草間殿主之助淨要が川中島決戦において戦死し、子信保は一族と共に越後へ移ったとしている〔竜徳寺文書〕が、本跡の廃絶もその頃のことであろう。

今回の調査は痕跡のはんの一部にすぎないものであった故、今後総合的調査によって、その全貌を究明する必要がある。

(2) 祭祀址 第2郭中央部西寄りに祭祀址と聖域を画するU字状溝の発見とともに祭祀遺物を検出することができた。和泉期末の平地の祭祀址(新井大口遺跡・中子塚境遺跡)はすでに知られているが、丘頂上における和泉期初頭の遺構・遺物は、古代における祭祀の変遷を考究するうえで重要な資料となるであろう。なお、本址から東へ約150~200mの丘頂には三基の円墳が点在し、これ等との関連も充実しなければならない。

(3) 弥生中期住居址 葉林・南大原遺跡にみられる円形プランの堅穴住居址1戸の検出をみた。U字状溝によって住居址の中央部は掘削されていたが、葉林式住居址とともに、それにともなう土器片・管玉・石器類の検出をみた。狭長な丘頂上の住居址は、聚落址のなかでどんな位置をしめるのか、また、葉林・南大原遺跡が平地に立地しているのと比較し、生活や農耕生産はどう當まれていたかを考究するうえで興味がもたれる。

(4) 織文・旧石器遺物 織文中期の土器片と石錐を得た。石錐は本跡を回続する二河川の漁撈に関係するものであろう。旧石器遺物は本跡の東側に連続する立ヶ花表遺跡(主体はナイフブレイド)とかかわりあるいは持つものと推定される。

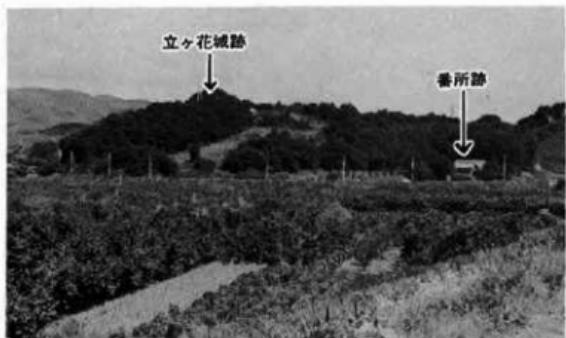
### 2. 立ヶ花表遺跡 遺構遺物は皆無であった。

### 3. 上の山窓1号窓址

用地内の調査のため灰原と須恵器片(多量)の検出にとどまった。灰原の様相から、用地外(南丘頂)に長さ約9~10m、巾1.5~1.7mの半地下式登窓が所在するものと思われる。灰原から出土の須恵片は平安時代初期のものであった。

今回の発掘調査にあたっては、県教委文化課指導主事郷道哲章先生、県史編纂委員桐原健・宮下健司先生の御指導と御助言を得た。記して感謝の意を表す次第である。また、中部電力株式会社からは物心両面にわたる御懇情をたまわり有難く厚く御礼を申しあげる次第である。

(金井汲次)



〈図版1〉 遺跡全景(千曲川堤防上より)



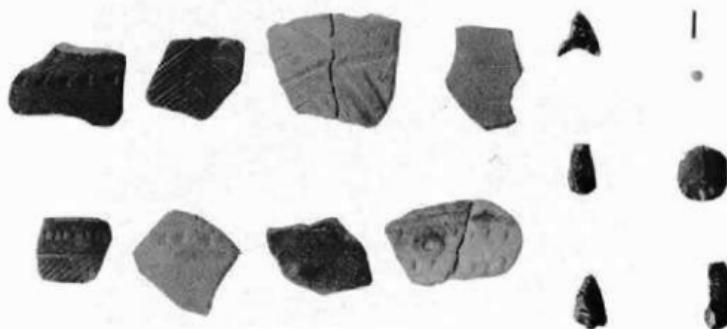
〈図版2〉 立ヶ花城跡発掘風景



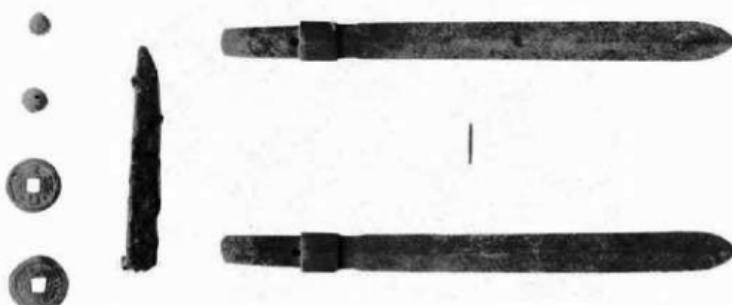
〈図版3〉 祭祀遺物出土状態



〈図版4〉 U字溝状造構



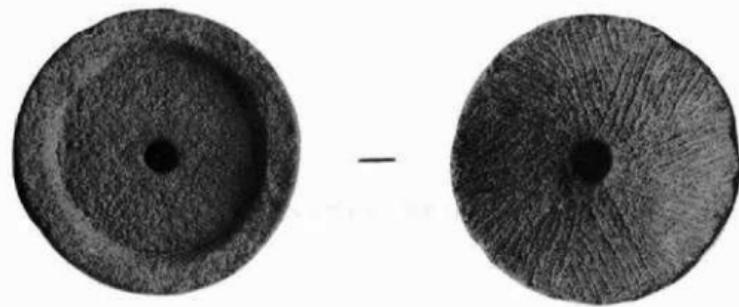
〈図版5〉 旧石器・繩文・弥生遺物



〈図版6〉 銃弾・古銭・刀子・鉈身



〈图版7〉 祭祀遗物



〈图版8〉 石制茶臼

立ヶ花城跡等緊急発掘調査報告書

昭和56年3月発行

発行 中野市教育委員会

中部電力株式会社長野支店

印刷 第一法規出版